※ 豆つぶころりん

あるところに、じいとばばとがいた。ある朝じいが庭をはいていたら、豆が一粒おちていた。それをひろってネズミの穴にこぼしてやった。そしたらネズミがきて、お礼をいいごちそうしたいから、しっぽにつかまって目をつぶっておれといった。

ネズミの家についたら何が好きかというので、モチがよいといった。ネズミ達は、「テタバタコンコン、ネコサエイネバ、シンショノミヨダ、バタバタデタバタコンコン」とモチつきをはじめた。

モチや酒をごちそうになって帰るとき、お土産として、お金のたくさん入った袋をもらって帰った。

じいは、新しい着物を買い、ごちそうをかってきてたべていたら、となりのよくたかればんばが来て、「オヤオヤ、昨日までは同じだけど、なんとして今日は、いいものを着て、いい料理で酒コのんでいるのだか」と、聞くので、ネズミの話をしてやると、じいをやってみると家に帰った。

じいは翌朝庭をはいたが、豆がおちていなかったので、家からもってきて、ネズミ穴をさがして落してやった。

まもなく、ネズミがきて、ネズミの家にいった。ネズミが聞く前に、モチがいいといった。唄をきいているうち、ネコのまねをすれば、ここにあるもの全部が自分のものになると考えたので、ネコのまねをした。すると、ネズミはみんな逃げ、まっくらになってしまった。じいは、今にあかるくなるだろうと思ってまっていたがあかるくならないため、手さぐりで穴をみつけ出して家になきなき帰って来た。

家には、ばんばがいまにお金をもってくるだろうと思い、着物まで全部やいてはだかになって待っていたが、なんにもならないことになったそうだ。